

この夏

倉橋惣三

門司

文部省の講習会、昭和保姆養成所の講習会を了へて、大井の會場から、特急列車富士號へ馳けつけたのが七月二十九日の午後。翌三十日の朝、下關で松村茂氏等に迎へられ、門司に渡つて、小倉市の公會堂へ車を走らせた。そこには北九州保育會主催の講習會の會員諸君が待つてゐられるのである。大分への途中にも、鹿兒島への途中にも、熊本への途中にも、福岡への途中にも、又昨年まで三夏つゞきの長崎への途中にも、いつも素通り、素歸りをしながら物足りなく思つてゐた此の土地である。奥へばかり通りぬけて、肝心の入口をゆつくり訪ねないことは、誰れにしたつて物足りないことに相違ない。この夏は其の機會が與へられたのである。私は、聊かホツミしたような心持ちで、その講習會場の演壇に立つた。

いふまでもなく北九州は我が國の現代的工業地域として筆頭に位するところである。福岡縣が教育縣として長く名をなしたのも、その現代的文化の必然現象を解釋していふものであらう。然るに、私は憂ふるが故に正直にいふが、幼稚園教育の發展だけは、その文化比率に伴はないところがある。少くも昨日までそうであつた。九州の東、西、南の三邊及び中央部に夫々保育會が立派な活動をしてゐるのに、たゞ此の北邊——しかも文化の入口である此の北邊に保育會の活動を聞かなかつたのである。私の旅程の上の物足りなさといふような呑氣な主觀でなく、斯界の爲に遺憾にたえなかつたのである。勿論、此の地方に立派な幼稚園はある。熱心な保育者諸君はゐる。たゞ一つの團結としての活躍が缺けてゐたのである。而して、此の事を土地の内部から最も遺憾としてゐられた人が、少くもその最も熱心なる一人が門司幼稚園長の松村茂君であることは、いつからいふことを忘れた程久しい以前から知つてゐたことである。果然、今回の講習會が同君

の盡力によつて、北九州保育會主催の名を以てせらるゝに至つたことは、講習會そのものよりも多大の意義を以て考へられ、喜ばるべきことである。私は、之を機會として我が尊敬する北九州の保育界の、向後の活躍を切に々々祈つて已まない。

講習を了つた三十一日の午後、松村君に案内せられて和布刈神社に詣でた。謠曲和布刈で有名な、あの古神事のある御社である。早柄の急潮に臨んで、壯觀無比。その岩頭の茶亭に宴を設けて鮮魚と共に夕陽美を満喫させられたことは、近來の快であつた。欄に近き急潮に逆ろう船、矢の如く流されてゆく船、流石に瀬戸内海の口を扼して早柄の名にふさはしきを思はせたが、折からの夏祭りの神樂太鼓の強き音の夕闇せまる潮の轟きに和して響き渡るのは、豪壯いふばかりなきものであつた。その夜十時、下關發の朝鮮行聯絡船に乗る。雲なし、二十日ばかりの月の影傾く。

釜 山

この夏の朝鮮行の主用は、京城で各道の保育者諸君のために三日間の講習をするにある。しかし、兼ねて數回の講演をするこゝになつてゐて、その皮切りを釜山公立高等女學校同窓會とする豫定になつてゐる。すなはち、今までいつも船から汽車へ素通りをした釜山が第一の目的地になつてゐるのである。

八月一日朝。阜頭へ迎へて下さつた多くの方々の中に石原ゆきさんもゐて、これから朝鮮にゐる間、私の旅が都合よく、ラクに運ぶように一切の手配をして待つてゐて呉れた。實際、萬端一方ならぬ世話になつたことである。

その日は午前高等女學校で講演、午後教育座談會といふプログラムで、相當汗ぐだらぬことをしやべつた冷汗の外にも出したが、その汗は郊外松島遊園の料亭の大廣間ですっかり拭はれて仕舞つた。實際ステキな絶景で、海から吹いて來る涼風を、糊のこわい浴衣の胸に一ぱいに受けてくつろいだ爽快さは、朝鮮第一日の印象を、すっかりアットホームにした。落合校長、及び辻與四郎氏の御歡待を深謝せざるを得ない。それにしても、前夜は此の海に向ふ側で潮を見たのである。今夕は本土を遠い對岸さして海を見てゐるのである。雲かき見ゆる對島を遙かに望みながら、匂には盛れない旅らし

い思ひも動いたりした。その夜の汽車で京城に向ふ。水害不通がやつき開通した跡を。

京 城

京城は滿洲への途次、二度立寄つたことがある。その第一回はもう二十年前にもならうか。私が朝鮮の幼稚園に初めて接したのはその時である。庚子記念京城公立幼稚園で内地人の幼児を見、京城幼稚園で鮮人の幼児を見た記憶は今もありありと残つてゐる。朝鮮保育界の兩元老たる京口さだ氏や大和田りよう氏に御懇意を得たのもその時からである。第二回目は幼稚園視察はしないで、たゞぶら／＼と數日滞留して、秋早い風物を駄句り散らして過した。その一句をも自分でも覚えてゐない位だから、餘程駄句ばかりであつたに相違ない。たゞその時或る人の紹介で見せて貰つた（思へば随分と圖圖しいことであつた）鮮人家庭の結婚式が、古びた版畫のような彩りで思ひ出される。——兎に角、朝鮮の保育界のためを、正面の目的として京城に來たのは、この夏が初めである。随分長い間、屢々そいふ話をうけながら、やつき實現せられた初めである。私とその欣ぶべき任務による緊張を以て、あの堂々たる京城驛に降り立つたことはいふまでもない。

それにしても、今度の、朝鮮としては最初だこはいはれる全鮮的講習會の實現に就ては、京城幼稚園協會長石原磯次郎老の多大の熱心と盡力とを先づ特筆しなければならぬ。同氏は併合前からの朝鮮に於て企業に成功せる實業界の人であるが、常に心を精神事業に傾け、現に自ら經營するところの彰榮女學校長にして同幼稚園長を兼ね各方面の社會公共事業に關係してゐる有力家である。風貌齋藤前首相に酷似せる温容雅順の好紳士である。その諸方面に於ける關係勢力が、今回の計畫の實現になつて如何に有利であつたかはいふまでもない。但し、老を中心させる協會幹部麻柄トヨ、井上みち、栗島左與乃、波々伯部だけ、其の他諸氏の勞の、之れ亦多大なりしことは勿論であるが、協會の活動の第一着手が其の力を待ちしことを否むものはない。講習は南大門小學校を會場として一、二、三、四の四日間に入り、内三日間の午前が私の保育講義、四日間の午後が牛島武夫氏の遊戯で、全鮮から集つた講習員諸君は最も熱心に終日受講せられた。その中に鮮

人保姆諸君の多數加はつてゐられたことは素よりである。

この講習の外に、京畿道社會事業協會により私を中心として開催せられた兒童保護座談會に愛育會理事として出席したのミ、龍山鐵道俱樂部で講演したのミ、愛國婦人會幼稚園ミ庚子紀念公立京城幼稚園ミの園舎を視たのミ、鮮人家庭の見學として白氏の家を訪ふたのミ、朝鮮神宮に詣で又祕苑の拜觀をしたのミ、府尹伊達四雄氏の招宴で本場の官妓の歌謠を聞いたのミ、而して多くの舊友新知に會つたことゝが、如何に寸暇なく四日間の京城滞在を充實せしめたかは、今想起するも愉快なることであつた。朝鮮ホテルのベットには深更一時より早く就いた夜がなかつた位である。

仁 川

講習を了へて、六日、前約によつて仁川を訪ふた。仁川教育會主催の講演會に臨むのミ、仁川紀念幼稚園を見るのが目的であるが、私の興味がより多く後者にあつたことはいふまでもない。同幼稚園は園長脇元茂子君の熱心なる銳意によつて、婦人會の後援を得、昨年改築せられた新造の模範園舎である。地は公園に接して丘上にあり、仁川港を一望におさめ、景勝に於て既に優秀であるが、その保育の實際も亦、常に進歩的態度を以て如何に優秀であるかは、折から朝鮮としては最も率先的實行である夏の幼稚園の半日を視たゞけでも測知することが出來た。その夜、府尹永井照雄氏及び教育會の諸君に誘はれて仁川名所月尾島に遊んだが、料亭の欄に近き群嶼の眉をひける如き軟かき線は、明るい夕空に一種獨特の畫趣を浮ばせてゐた。仁川より京城へ。而して多數の方々の好意あるお見送りを受けて、夜の汽車は再び釜山へ。

再び釜山

釜山へ歸り著いたのは七日の朝である。そのまゝドライブして海雲臺の温泉に投じた。東萊温泉ミ並ぶ新しい温泉である。海に近く打ち開けた四邊の風景は連日の不休に聊か疲勞した頭を慰むるに最も好適の地であつた。而して、その夜は釜山鐵道俱樂部で講演。翌日は午後、朝鮮最初の幼稚園たる本願寺幼稚園の園舎を訪ひたる後、教育會主催の夜の講演會

に臨み、十時乗船、朝鮮一週間の旅程を了した。此の一週間は水害及び天候の關係で、最初の豫定より短縮せられたものであつたが、それでも私にまつては相當充實した内容が盛られてゐる。この上、各地を巡歴し、殊に金剛山や慶州の見物をしたまじしたら、餘り感興が多過ぎて持てあましたかも知れない。次の機會のために残してお置きになるのもいゝでせうと言つて呉れた石原ゆきさんの言葉は、眞にその通りであらう。

月

朝鮮から歸つて直ぐ、家族達の行つてゐる高原の山莊へ暑を避けたが、その白樺の林の中で、ふみ見つけた月は淡い舊曆五日の月であつた。薄いぎてらを羽織つて、その林の中を歩いたりした。越えて七日、舊曆十一日の月は琵琶湖に臨む大津の宿の庭さきで見た。滋賀縣廳の講習のために赴いて、二日間を朝に午後、夕に夜に、琵琶湖邊の客まなつてゐたのである。翌舊曆十二日の月は比叡山の杉の木立の間から見た。こいふよりも其月明りで叡山越しをしたこいつてよい。その夕、お山の宿院で精進料理の夕飯をゆつくりすませてから、四明ヶ嶽に沿ふて京都口のケーブルまで歩いたのである。しかも、その夜の月は山を下りてから後も、私こいつしよに京都の町を歩いて呉れた。

翌舊曆十三日と十四日と十五日の月は東京で見た。中央融和事業協會の講習と、教育會の講習のために滞在してゐたのである。尤もその中のこの月だかを銀座で見たのは、月もきつこ笑つたであらう酔興であつた。

翌舊曆十六日の月は再び高原で見たが、淺間の方から動いて來る雲の迅さに、あわたしい光を漏らすだけであつた。前夜の満月は一片の雲の影もなく晃々こ晴れて、澄み渡つた光りは眞に高原の月夜の美の極致であつたのである。もう一日早くいらつしやれ、ばよかつたにこ、家族達は惜しがつて呉れたが、きのふの月ほごごうしようもないものはない。

(昨年「この夏」は九月號に間にあはず、ゆつくり書こうと思つてゐて、とうとう機を失つて仕舞つた。今年はそれにこりて、兎に角く切に間にあはせるだけの筆を執つた。文意盡さず、殊に各地の諸君への謝意を盡し得ないこと甚だしい。御諒恕を乞ふ。)